

短 報

「エビデンス・ベースト・ライブラリアンシップ」(EBL)の枠組みの検討：  
日本の図書館情報学文献の実態に基づいて

Re-Examination of Evidence-based Librarianship (EBL):  
A Content Analysis of Journal Articles

上 田 修 一  
*Shuichi UEDA*

汐 崎 順 子  
*Junko SHIOZAKI*

國 本 千 裕  
*Chihiro KUNIMOTO*

宮 田 洋 輔  
*Yosuke MIYATA*

林 佐 和 子  
*Sawako HAYASHI*

三 根 慎 二  
*Shinji MINE*

石 田 栄 美  
*Emi ISHIDA*

倉 田 敬 子  
*Keiko KURATA*

上田修一：慶應義塾大学文学部，東京都港区三田 2-15-45

Shuichi UEDA: Faculty of Letters, Keio University, Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345,

e-mail: ueda@slis.keio.ac.jp

汐崎順子：慶應義塾大学大学院文学研究科，Graduate School of Library and Information Science, Keio University, e-mail: shio-js@slis.keio.ac.jp

國本千裕：慶應義塾大学大学院文学研究科，Graduate School of Library and Information Science, Keio University, e-mail: chihirok@slis.keio.ac.jp

宮田洋輔：慶應義塾大学大学院文学研究科，Graduate School of Library and Information Science, Keio University, e-mail: miyayo@slis.keio.ac.jp

林佐和子：慶應義塾大学大学院文学研究科，Graduate School of Library and Information Science, Keio University, e-mail: shayashi@slis.keio.ac.jp

三根慎二：慶應義塾大学文学部（非常勤講師），Faculty of Letters, Keio University (part-time), e-mail: mine@slis.keio.ac.jp

石田栄美：駿河台大学文化情報学部，Faculty of Cultural Information Resources, Surugadai University, e-mail: emi@surugadai.ac.jp

倉田敬子：慶應義塾大学文学部，Faculty of Letters, Keio University, e-mail: keiko@slis.keio.ac.jp

受付日：2007年8月17日 受理日：2007年11月22日

## Résumé

**Purpose:** The evidence-based librarianship (EBL) approach promotes the application of research results to library services and at the same time, is a promising methodological framework for further improving the quality of research in library science. In this paper, the issues surrounding EBL and its application are discussed.

**Method:** One hundred Japanese journal articles on library and information science were coded according to the level of their EBL evidence (one of seven levels), the three types of EBL questions, and the domain of the article as defined in the EBL approach.

**Results:** Thirty three articles were identified as case studies (Level 6) and fifty three articles were identified as expert opinion (Level 7). Only two articles were coded as summing up (Level 2) which are said to have high EBL evidence. Thirty percent of the papers did not contain questions; therefore, they were not able to be assigned to one of the three types of questions. Fifteen of the articles were in the “collections” domain and twenty three were in the “management” domain; however, no articles were in the “marketing/promotion” domain. Since the concept of EBL is derived from evidence-based medicine (EBM), it can be difficult to apply it to articles in library and information science.

### I. EBL とは

- A. EBL の概要
- B. EBL の枠組み

### II. 日本の図書館情報学分野の論文の調査

- A. 調査方法
- B. 調査結果

### III. 日本の図書館情報学分野の文献と EBL の枠組みの問題点

- A. EBL の枠組みからみた日本の図書館情報学分野の論文
- B. EBL の問題点

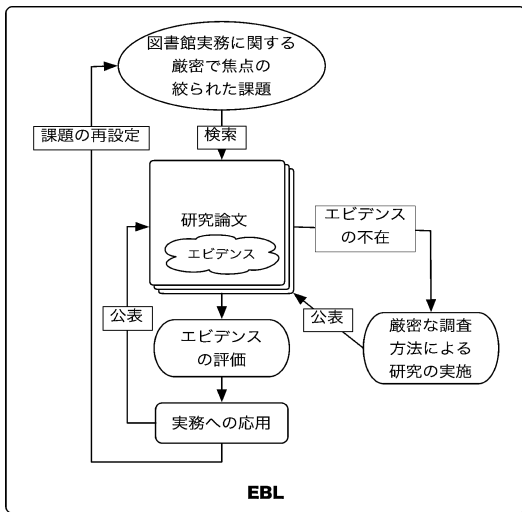
## I. EBL とは

### A. EBL の概要

「エビデンス・ベースト・ライブラリアンシップ」(EBL: Evidence Based Librarianship) は、図書館業務における各種の判断に信頼できる根拠を用いようとする運動と理解される。EBL に代わって、2006 年頃から EBLIP (Evidence Based Library and Information Practice) という表現が使われるようになった。この分野の代表的な論者であるブースは、EBLIP を「最良の利用しうるエビデンスと実務経験から得られた識見を用いた

図書館業務と情報提供業務の改善の探求」と定義し、「日常業務で問題を提起し、関連領域からの研究成果を発見し、批判的に吟味し利用することを含む」と述べている<sup>1)</sup>。ギャラガーらはイェール大学図書館における、冊子体雑誌の購読中止にあたって、種々の統計的情報源を用いた判断の過程を EBL と呼んでいる<sup>2)</sup>。

たとえば、図書館で新しい利用者サービスの導入を検討する際に、同僚の意見や過去の経験に基づいて判断するのは EBL とは言わない。課題を厳密に定義し、関連文献を検索し、検索結果として得られた文献の内容について妥当性を検討



第1図 EBLの過程

し、それらをまとめたものに基づいてサービス導入を判断するといった手続きはEBLである。また、適切な文献がない場合、つまり根拠を得られないときに図書館員が自分で適切な研究手法によって調査を行い、その結果に基づいて意思決定をすればそれはEBLである。このように、EBLは一連の過程としても論じられる。図示するなら第1図のようになる。

EBLは「エビデンス・ベスト・メディシン」(Evidence Based Medicine)から派生したものである。「エビデンス・ベスト・メディシン」は、「根拠に基づく医療」と訳され、通常はEBMという略称が用いられている。EBMという言葉が現れたのは1990年代初めであるが、実際には、1970年頃にカナダのマクマスター大学臨床疫学者デビッド・サケットらによる臨床医学雑誌論文の読み方を検討する研究会に始まる<sup>3)</sup>。臨床、応用への妥当性という視点から医学論文における実験結果の「批判的吟味」(critical appraisal)の方法を論じた活動成果は、有力な医学雑誌『JAMA』誌に連載されて評判となった<sup>4)</sup>。1992年に「Evidence Based Medicine」という表現が用いられ<sup>5)</sup>、EBMは瞬間に医療の分野でよく知られるようになり、米国、欧州そして日本へと広まった。

臨床疫学から始まったEBMは、精神医学、歯学、看護学、病理学、薬物治療学といった医学の諸分野で取り入れられ、さらに1990年代の終わりには、教育、社会福祉、人事管理、犯罪学へと広まり、EBP(Evidence Based Practice)という用語も現れた<sup>6)</sup>。EBLはEBPの一つであるが、EBMとも関わりが深く、エルドリッジは当初、健康科学図書館学という用語を使っていた<sup>7)</sup>。

EBLについては、国内でも既にいくつかの紹介記事がある<sup>8)~11)</sup>。2007年に米国で開催された第4回EBLIP国際会議では、日本からの研究発表もあった<sup>12)~14)</sup>。

前述のように、過程として見た場合のEBLでは、問題解決の際に採るべき最初的手段は文献の探索である。文献検索の結果、EBLという観点から見て妥当な文献群があればそれを用いるのであり、必ずしも毎回、新しく調査を行うことが期待されてはいない。しかし、EBLから見て妥当な文献が十分な量なければ、独自のデータ収集を行わなければならない。つまり、EBLを実施するには、EBLから見て「根拠」が強いとみなされる文献群の存在が不可欠となると考えられる。

本稿は、日本の図書館情報学分野において、EBLから見て「根拠」が強いとされる文献が十分な量、存在しているかどうかを明らかにするため、日本の図書館情報学関係雑誌記事をEBLの枠組みによって調査する。その調査の結果をもとに、まず、EBLの観点から見た日本の図書館情報学関係雑誌に掲載された記事の実態を示す。次いで、こうした作業を通じて明らかになるEBLが抱える諸問題について言及する。

## B. EBLの枠組み

先に述べたようにEBMは、臨床医学論文の読み方の改革から始まった。臨床報告を注意深く読むことにより、根拠の検討が行われ、次第に、論文で採用されている研究方法へと移り、診療ガイドライン作成へと向かっていった。

EBMでは、常に根拠の強さが問題とされる。そして、得られる根拠の強さは、用いられている研究方法あるいは研究設計法によって判断されている。つまり、EBMでは、採用される方法によっ

て、その研究の持つ根拠の強さが計られる。こうしたEBMの持つ研究方法や研究設計法に対する強い関心は、他の分野で展開される際にも受け継がれており、EBLにおいても同様である。

以下では、EBLの枠組みとして、エルドリッジ<sup>15), 16)</sup>が挙げている(1) EBLの根拠のレベルと、(2) 課題のタイプ、それに、クラムリーとコウフォギアンナキス<sup>17)</sup>が整理した、(3) 調査対象文献が扱う主題領域の分類を用いる。

#### 1. EBLの根拠のレベル

エルドリッジは、研究法あるいは研究設計法を根拠の強い順に挙げて、それらを「EBLの根拠のレベル(EBL levels of evidence)」と呼んでいる<sup>16)</sup>。これは、その後もたびたび言及されている。そこで、「EBLの根拠のレベル」に挙げられた方法あるいは研究設計法について、以下で簡単に説明するとともに、図書館情報学におけるそれらの方法の応用例を示す。提示する順序は、根拠の強さの順となっている。

##### (1) 体系的レビュー(Systematic review)

従来の文献レビューは記述的(ナラティブ)であり、著者の経験や主張などに依存する部分が多いが、体系的レビューでは、網羅的な文献探索の結果に対して、事前に設定された明確な基準で論文が選択され、著者による主観的な操作は除かれる<sup>18)</sup>。

図書館情報学分野での体系的レビューの例としては、コウフォギアンナキスとウィーブによる学部学生に対する情報リテラシー教育の方法<sup>19)</sup>に関する論文がある。彼らは15種のデータベースや索引から4,356件の文献を見つけ、その中から設定した条件や質の規準に合致した55件を選択しメタ分析を含む文献レビューを行っている。

##### (2) メタ分析(Meta-analysis)とサミングアップ(Summing up)

メタ分析を用いた研究では、ある一つの課題について一群の研究を、体系的に洗い出して、どの研究を採用するか、除外するかという基準を定め、基準に合った複数の研究結果からデータを抽出する。そして、データを統計的に検討する<sup>20)</sup>。一方、ライトとピルマーによる解説書<sup>21)</sup>で知られ

ている「サミングアップ」もまた、従来の既往研究レビューが主観的になりがちであるとして、レビュー対象となる研究の結果の分布などを図や表で示そうとするものである。

図書館情報学でのメタ分析の例として、1965年から1993年までのレファレンスサービス評価に関する58論文のメタ分析を行ったサクストン<sup>22)</sup>や、癌患者の情報ニーズへの影響因子を分析したアンケム<sup>23)</sup>がある。

##### (3) 無作為化比較試験(RCT)(Randomized Controlled Trial)

無作為化比較試験において被験者は無作為に二つ以上の集団に分けられ、一方の集団は何らかの介入を行う実験群となり、もう一方は何も介入を行わない対照群となる。実験群も対照群もその効果を明らかにしたい要因以外では統制されていることが必要となる<sup>24)</sup>。

データベース探索の検索式作成のための3時間の訓練の効果を調べるために、108名の学生被験者を54名ずつの二群に分けて調査した例<sup>25)</sup>がある。

##### (4) 後向きコホート研究(Retrospective cohort study)と前向きコホート研究(Prospective cohort study)

コホートとは、共通の経験や環境を共有する集団のことで、コホート研究はこうした集団を対象とした調査である<sup>24)</sup>。暴露や介入の有無で分けられた実験群と対照群に対して、過去の記録を調べるのが後向きコホート研究で、研究開始時から未来へ向かって追跡調査し、得られる結果を測定するのが前向きコホート研究である。

学校図書館メディアスペシャリスト用の教育コースを受講する学生を遠隔教育群と対面教育群に分けて、その効果の違いを見た調査がコホート研究と題されている例がある<sup>26)</sup>。

##### (5) 社会調査(Survey)

実態を調べる質問紙調査などである。

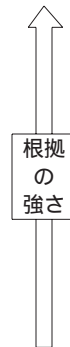
##### (6) 事例研究(Case study)

一つもしくはごく少数の事例に基づくもので、実証的な分析というより質的分析を行っている。

##### (7) 専門家の意見(Expert opinion)

第1表 課題別の EBL の根拠のレベル<sup>16)</sup>

予測型課題	比較型課題	探索型課題
体系的レビュー	体系的レビュー	体系的レビュー
メタ分析	メタ分析	サミングアップ
後向きコホート研究	無作為化比較試験 (RCT)	比較研究
前向きコホート研究	後向きコホート研究	質的研究
社会調査	前向きコホート研究	社会調査
事例研究	社会調査	事例研究
専門家の意見	事例研究	専門家の意見
	専門家の意見	



特に調査を行わず、自分のこれまでの経験などに基いて意見を表明する。

## 2. EBL の課題の種類

EBL の過程は第1図で示したように、「厳密で焦点の絞られた」課題の設定から始まる。エルドリッジは、EBL に基づく課題を「予測型課題」、 「比較型課題」、 「探索型課題」 の3種類に分類した<sup>15)</sup>。

「予測型課題」とは、類似した状況下におけるアウトカムを予測するもので、コホート研究が典型例である。たとえば、情報スキルを学んだ学生は継続してそれを使って学習をし続けるのかどうかという課題が考えられる。

「比較型課題」とは、意図した目的や成果を成し遂げる際に効率性という観点から異なる行動を比較するものである。医学生は検索スキルを図書館員あるいは教員のどちらからより効果的に学ぶのかといった課題が考えられる。

「探索型課題」とは、「なぜ」という言葉で始まるような課題であり、ここでは質的研究が中心となる。利用者はなぜある情報源をほかの同等の情報源に対してより好むのかといった課題が典型例となる。

EBL が図書館の実務を中心に据えているのなら、「予測型課題」のみでよいはずであるが、ここでは、「比較型課題」や「探索型課題」を導入し、図書館情報学研究にも一定の配慮をしているとみられる。

そして、エルドリッジは、これらの EBL に基づく課題と EBL の根拠のレベルとを組み合わせた表を作った<sup>15)</sup>。さらに 2007 年には、この表の改訂版を示している<sup>16)</sup> (第1表)。ここでは、それぞれの課題ごとに、強い根拠を得ることのできる順に EBL の根拠のレベルが表示されている。すなわち、上のものほど得られる根拠のレベルは高く、「体系的レビュー」は最も強い根拠を得ることのできる方法であり、「専門家の意見」を集めても根拠は弱い。ただ、これは研究の質や価値それ自体の評価を意図するものではないとされている。

## 3. 対象主題の分類

クラムリーとコウフォジアナキスは EBL を実践する際に、図書館業務は「レファレンス・調査」、 「(利用者・利用)教育」、 「蔵書構築」、 「経営管理」、 「情報検索と情報へのアクセス」、 「マーケティングと広報」の6領域に分類されるとしている<sup>17)</sup>。

## II. 日本の図書館情報学分野の論文の調査

以上のような EBL 独特の方法や課題、主題領域という観点に基づき日本の図書館情報学分野の文献を対象とし、実態を調査した。

### A. 調査方法

#### 1. 調査対象文献

日本の図書館情報学分野の雑誌掲載論文、記事を対象とし、日本の図書館情報学分野の文献を収録している日本図書館情報学会『BIBLIS2』から

第2表 調査対象文献の収録雑誌

順位	雑誌名	収録件数
1	情報管理	10
2	情報の科学と技術	10
3	シリーズ図書館情報学のフロンティア	8
	図書館界	8
	日本図書館情報学会誌	8
6	医学図書館	7
7	現代の図書館	6
8	Library and Information Science	4
	NII ジャーナル	4
	情報処理学会論文誌	4
	図書館学	4
12	(3誌)	9
15	(6誌)	12
21	(6誌)	6
	計	100

第3表 EBLの根拠のレベル

根拠のレベル	件数
体系的レビュー	0
メタ分析	0
サミングアップ	2
無作為化比較試験(RCT)	0
コホート研究	0
社会調査	12
事例研究	33
専門家の意見	53
計	100

2004年に発表された雑誌記事を抽出した。できるだけ研究論文が含まれるようにするため、文献を引用文献数の多い順に配列し、そこから上位100件を調査対象として選んだ。ここではこれらを「論文」と呼ぶ。

対象とした100件の論文は、26誌に掲載されており、雑誌別の掲載件数は第2表のとおりである。

## 2. 調査方法

各論文を以下の三つの調査項目について筆者が調査した。1論文に対して2名が担当し、全体を読んで、それぞれの調査項目に関して、該当する分類項目などを選んだ。調査者2名の結果が異なれば議論して結果を得た。

### (1) EBLの根拠のレベル

該当の論文がどの「EBLの根拠のレベル」に当てはまるかを調べた。複数の方法があった場合には、レベルが最も高いものを選択した。

また、EBLの根拠のレベルと一般的な研究調査方法を用いた場合とを比較するため、図書館情報学における代表的な研究調査方法のどれが使われているのかを調べた。図書館情報学における代表的研究調査方法としては、マーチン<sup>27)</sup>、サンドストローム<sup>28)</sup>、ヒオルランド<sup>29)</sup>を参考に、あらかじめ、質問紙法、面接法、実験、観察法、エスノメソドロジー、内容分析、プロトコル分析、ログ分析、ビブリオメトリックス(引用分析)、歴史研究、事例報告、文献検討、条文検討、統計データの分析という14種類を設定した。

### (2) 課題の分類

論文が、「予測型課題」、「比較型課題」、「探索型課題」のどれにあたるかを判断した。専門雑誌とのこれまでの関わりについて述懐した記事、あるいは官庁の担当者が補助金について説明した記事などは、課題は「なし」とした。

### (3) EBLの主題領域

論文の主題がクラムリーらの6領域に「その他」を加えた7領域のうちのどれに当てはまるかを調べた。

## B. 調査結果

### 1. EBLの根拠のレベル

調査対象とした100件の文献のEBLの根拠のレベルを第3表に示した。「専門家の意見」が53件、「事例研究」が33件、「社会調査」が12件であり、これらの根拠のレベルの低い方法でほぼすべてを占めている。

EBLの根拠のレベルが高い「サミングアップ」が2件あり、いずれも情報検索のトピックに関して多数の文献をレビューしているものだった。

### 2. 課題の分類

課題の分類をもとに集計すると第4表のようになり、ほぼ7割が「探索型課題」を設定し「比較型課題」は2件、「予測型課題」とみなされる論文はなかった。課題のないものは30件あった。

従来の研究調査方法は、一つの論文で複数の調査方法をとっている場合はそれぞれ計数した(第

第4表 課題別に見た EBL の根拠のレベル

予測型課題		比較型課題		探索型課題		その他	
体系的レビュー	0	体系的レビュー	0	体系的レビュー	0		
メタ分析	0	メタ分析	0	サミングアップ	2		
		無作為化比較試験 (RCT)	0	比較研究	0		
後向きコホート研究	0	後向きコホート研究	0	質的研究	0		
前向きコホート研究	0	前向きコホート研究	0				
社会調査	0	社会調査	2	社会調査	10		
事例研究	0	事例研究	0	事例研究	25	事例研究	8
専門家の意見	0	専門家の意見	0	専門家の意見	31	専門家の意見	22
計	0	計	2	計	68	計	30

第5表 一般的な研究調査方法

研究調査方法	件数
質問紙法	3
面接法	2
実験	6
観察法	1
エスノメソドロジー	0
内容分析	3
プロトコル分析	0
ログ分析	1
ビブリオメトリックス(引用分析)	1
歴史研究	12
事例報告	31
文献検討	50
条文検討	3
統計データの分析	2
計	115

第6表 EBL の主題領域

主題領域	件数
レファレンス・調査	2
(利用者・利用)教育	2
蔵書構築	15
経営管理	23
情報検索と情報へのアクセス	9
マーケティングと広報	0
その他	49
計	100

### III. 日本の図書館情報学分野の文献と EBL の枠組みの問題点

#### A. EBL の枠組みから見た日本の図書館情報学分野の論文

このように、エルドリッジらの言う EBL の枠組みから日本の図書館情報学文献を見ると、根拠の強いとされる方法を用いた論文はほとんどなく、弱い根拠しか持たない「事例研究」や「専門家の意見」を用いている論文が 86% を占めた。また、EBL とは関わりなく、一般的な調査方法の使用という点から見ても「事例報告」と「文献検討」で 8 割を超えている。多数を占める「文献検討」には、既存の文献を引用しているとはいえ、単なる紹介記事にとどまっているものが多く、新しい成果を提示するという側面は乏しい。

5 表)。「文献検討」すなわち、専ら他の文献や資料をもとに議論を行う種類の論文が半数 (50 件) を占めた。次に、「事例報告」(31 件)、「歴史研究」(12 件)、「実験」(6 件)が続いている。

#### 3. EBL の主題領域

主題は、「経営管理」が 23 件と最も多く、「蔵書構築」(15 件)、「情報検索と情報へのアクセス」(9 件)が続いており、「マーケティングと広報」はなかった。これらの分類に当てはまらない、図書館サービスを扱っていない論文が 49 件と半数近くに達している (第 6 表)。

もちろん、ここで対象とした100件の「論文」は、研究論文に限られておらず、解説記事を多く含んでおり、また査読されているものは少数で、大多数は雑誌編集部から依頼されたものである。しかし、前述のように、EBLの過程では、最初に文献探索が行われるが、その際に、探索課題に合致するある程度の文献が存在しなければその後の過程を続けることができない。

日本の図書館情報学分野では、研究論文や査読された論文の数は少ないため、引用文献数が多いものというように基準を緩めた。しかし、それでも引用文献数の上位100件の中では弱い根拠しか持たない「事例研究」や「専門家の意見」を用いている論文は86件に達した。これらより引用文献が少ない、あるいは引用文献がない文献では、「事例研究」や「専門家の意見」はさらに増えると予想される。『BIBLIS2』収録の2004年刊行の文献数は1,696件であるが、引用文献数で制限せず、この全体を対象とするなら、EBLで言う根拠の乏しい文献がほぼすべてとなるだろう。

つまり、日本の図書館情報学分野では、毎年、ある程度の量の文献が刊行されているものの、EBLという観点で役立つ文献はほとんどないと言える。

また、エルドリッジらの言う「EBLの課題」という観点から論文を分類したが、こうした課題自体を持たない文献が30件に達した。分類する際には、解説や報告記事においても、著者が論述するにあたって課題を設定しようとする表現があるかどうかで判断した。この結果からは、目的の明確でない文献が3割もあったことになる。

## B. EBLの問題点

### 1. EBLの枠組み

一方、EBLの持つ諸問題もまた、明らかになったと言える。この調査の調査対象は、国内の日本語文献であり、欧米の論文を対象とはしていない。しかし、この調査の準備段階で、EBLにおいて根拠のレベルが高いとされ、EBLを象徴する体系的レビューやメタ分析、サミングアップを行っている論文を、海外の図書館情報学データベースで探索した。しかし、これらの実例を見つ

け出すのは極めて困難だった。

図書館情報学において、体系的レビューやメタ分析の例がほとんどない理由は、これらの方法は、大量の無作為化比較試験やコホート研究の存在を前提にしているにもかかわらず、無作為化比較試験やコホート研究の実例もまた、図書館情報学では極めて乏しいためである。コウフォジアナキスらは、2001年に発表された図書館情報学分野の雑誌91タイトルに掲載された2,664件の内容分析を行っているが、無作為化比較試験やメタ分析を行っている文献はわずか12件にとどまっている<sup>30)</sup>。

医学や医療の分野においては、無作為化比較試験やコホート研究は、実験群に特定の治療法を施したり薬剤を投与するなどして、対照群と効果を比較するという形で一般的に行われている。そして、これは医学や医療の核心部分でもある。しかし、図書館では、特定のサービスを受けさせるか、特定の訓練を行う、といった極めて限られた形でしか、被験者に対する介入や暴露を行うことはない。それに、これは図書館の抱える課題のごく一部でしかない。また、コホート研究で必要な、同一集団に対する経時的な追跡調査は、被験者を長期間引き留めておかねばならず、実施が難しい。無作為化比較試験は、EBMの標準的な手法とされるのであるが、エルドリッジでさえも、図書館情報学への応用においては困難があると述べている<sup>24)</sup>。

EBMの影響を受けたブースやエルドリッジといったEBLの提唱者たちが、医学と図書館情報学、あるいは医療と図書館サービスの違いをさほど考慮せず、EBMをほぼそのまま、図書館に適用しようとしている点に無理があると言える。

もともとEBMには啓蒙、あるいは運動としての一面があった。医療以外へ広がっていったのも、適用可能性が議論される前に、「根拠に基づく」という否定のできない言葉が使われていたからであろう。研究において根拠が重視されなければならないのは、どの分野でも共通であろうが、どのようにして根拠を得るのか、得られた根拠をどのように使うのかは、分野や領域で異なると考



えられる。EBLには、EBMの枠組みをそのまま持ち込むのではなく図書館サービスや図書館情報学向けに構築される必要がある。

2. EBLの根拠のレベル

エルドリッジは、「コホート研究」や「体系的レビュー」などを「EBLの根拠のレベル」という曖昧な表現で総称している<sup>15), 16)</sup>。こうした「EBLの根拠のレベル」は、根拠の強さを示すだけで、研究の質を表すものではないとされている。コウフォジアナキスらは、「質問紙法」や「ビブリオメトリックス」などの従来の研究調査方法と「EBLの根拠のレベル」の中の「体系的レビュー」、「メタ分析」、「コホート研究」などを研究方法としてひとまとめに扱っている<sup>30)</sup>が、両者に対し同じ扱いをするのは難しいと考えられる。

一つの研究論文の中に体系的レビューがあり、質問紙法による調査結果がありうるであろうし、また、研究報告や解説を書くという行為とは別に、図書館業務のためにメタ分析を行って発表するという活動がありうる。両者は次元が異なると見なさう。「EBLの根拠のレベル」の中に「社会調査」といった従来の研究調査方法を持ち込み、EBLと従来の研究調査方法を接続するのは無理があると考えられる。

3. EBLの主題領域の分類

クラムリーらが図書館業務から割り出したとする6領域<sup>17)</sup>に図書館情報学分野の論文を分類し

たところ、どの分類にも該当しない論文が5割弱を占めた。また、「マーケティングと広報」がいかに重要であろうとも、これは「経営管理」に入れることができる。また、「情報検索と情報へのアクセス」は、他の項目と比べて異質であると考えられる。

EBLで文献探索の対象となるデータベースは、図書館情報学のデータベースであり、そこには、図書館業務に直接に関わらない研究論文も含まれている。しかし、それらの文献はEBLにおいて利用される可能性は大きいと考えられる。

クラムリーらは、EBLで用いる主題領域を図書館の業務に限って、その上、理由を明らかにしないまま医学図書館を想定している点には再考の余地があろう。

そこで、調査から得られた結果をもとに、新しい主題領域を設定し、再度、対象論文をコーディングした。新主題領域ではまず、「図書館業務関連」と「図書館業務以外」の2領域に大別し、さらに前者は、「パブリックサービス」、「テクニカルサービス」、「経営管理」、「情報検索とアクセス（図書館を経由したもの）」に、後者は、「メディア研究」、「情報検索とアクセス（図書館を介さないもの）」、「その他」に分けた。

再コーディングの結果、最も多いのは「経営管理」（22件）であり、分類できない「その他」は22件に減った。

第7表 主題領域の再分類

旧分類		新分類			
主題領域	件数	図書館業務関連		図書館業務以外	
		主題領域	件数	主題領域	件数
レファレンス・調査	2	パブリック・サービス	5	メディア研究	9
(利用者・利用)教育	2	テクニカル・サービス	15		
蔵書構築	15	経営管理	22		
経営管理	23	情報検索とアクセス (図書館を経由したもの)	9	情報検索とアクセス (図書館を介さないもの)	18
情報検索と情報への アクセス	9			その他	22
マーケティングと広報	0	小計	51	小計	49
その他	49	100			
計	100				

この主題領域の分類は、EBMにおける医療と医学研究それぞれの目的の違いから起きる対立と同様な問題がEBLにおける図書館業務と図書館情報学研究との間に内在することを示唆している。

EBLという観点から日本の図書館情報学分野の文献の内容分析を行い、実態を示した。また、EBLについてのこれまでの言説を検討し、文献の内容分析の過程からEBLの持っている問題点を明らかにした。

現在のEBLには問題が多く、今の枠組みをそのまま使っていくには無理がある。しかしながら、研究や文献に強い根拠を求める姿勢は評価されなければならないだろう。図書館の実務で過去の研究成果を探索し、統合、吟味して利用するばかりでなく、研究や調査を行う者と文献を執筆する者に対し、絶えず「根拠」を意識させるという点で、EBLは意義があると言わなければならない。

調査に使用した日本図書館情報学会『BIBLIS 2』データベースを提供して下さった日本図書館情報学会文献目録委員会に感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) Booth, A. Counting what counts: The link between performance measurement and evidence based information practice. *Performance Measurement and Metrics*. 2006, vol. 7, no. 2, p. 63-74.
- 2) Gallagher, J.; Bauer, K.; Dollar, D. M. Evidence-based librarianship: Utilizing data from all available sources to make judicious print cancellation decisions. *Library Collections, Acquisitions, and Technical Services*. 2005, vol. 29, no. 2, p. 169-179.
- 3) Bayley, L.; McKibbin, A. Evidence-based librarianship: A personal perspective from the medical/nursing realm. *Library Hi Tech*. 2006, vol. 24, no. 3, p. 317-323.
- 4) The Evidence-Based Medicine Working Group 編. *JAMA 医学文献の読み方*. 開原成允, 浅井泰博監訳. 中山書店, 2001, 197p.
- 5) Evidence-Based Medicine Working Group. Evidence-based medicine: A new approach to teaching the practice of medicine. *JAMA*. 1992, vol. 268, no. 17, p. 2420-2425.
- 6) Booth, A. Bridging the research-practice gap?: The role of evidence based librarianship. *New Review of Information and Library Research*. 2003, vol. 9, no. 1, p. 3-23.
- 7) Eldredge, J. D. Cohort studies in health sciences librarianship. *Journal of the Medical Library Association*. 2002, vol. 90, no. 4, p. 380-392.
- 8) 河合富士美. EBMからEBLへ. *日赤図書館雑誌*. 2003, vol. 10, no. 1, p. 5-7.
- 9) 永田治樹. 大学評価と図書館評価. *情報の科学と技術*. 2005, vol. 55, no. 12, p. 541-545.
- 10) 依田紀久. 動向レビュー: 根拠に基づいた図書館業務の設計: 実践家の成果の共有を目指すEBLIPの動向. *カレントアウェアネス*. 2007, no. 291, p. 8-12.
- 11) 上田修一. 図書館情報学研究における「根拠(エビデンス)」. *情報の科学と技術*. 2007, vol. 57, no. 5, p. 226-232.
- 12) Nagata, H.; Toda, A.; Kytömäki, Päivi. "Students' patterns of library use and their learning outcomes". *Evidence-Based Library & Information Practice 4th International Conference*. Durham, North Carolina, 2007-5-6/11. <http://www.eblip4.unc.edu/papers/Nagata.pdf>, (accessed 2007-11-28)
- 13) Oda, M.; Yoda, N. "Reference transaction records as evidence of reference librarian's competencies". (Poster presentation). *Evidence-Based Library & Information Practice 4th International Conference*. Durham, North Carolina, 2007-5-6/11.
- 14) Sakai, Y.; Kiyama, Y. "Is 'Igaku Toshokan' providing the evidence to help medical librarians with decision-making?". (Poster presentation). *Evidence-Based Library & Information Practice 4th International Conference*. Durham, North Carolina, 2007-5-6/11.
- 15) Eldredge, J. D. Evidence-based librarianship levels of evidence. *Hypothesis*. 2002, vol. 16, no. 3, p. 10-13.
- 16) Eldredge, J. D. "Introduction: Evidence-based librarianship-current trends". *Evidence-based Librarianship: Case Studies and Active Learning Exercises*. Connor, E. ed. Chandos Publishing, 2007, p. xxi-xxxviii.
- 17) Crumley, E.; Koufogiannakis, D. Developing evidence-based librarianship: Practical steps for implementation. *Health Information and Libraries Journal*. 2002, vol. 19, no. 2, p. 61-70.
- 18) Charlmers, I.; Altman, D. G. システムティック・レビュー: エビデンスをまとめてつたえる. 津谷

- 喜一郎, 別府宏園, 浜六郎監訳. サイエティスト社, 2000, 173p.
- 19) Koufogiannakis, D.; Wiebe, N. Effective methods for teaching information literacy skills to undergraduate students: A systematic review and meta-analysis. *Evidence Based Librarianship and Information Professionals*. 2006, vol. 1, no. 3, p. 3-43.
  - 20) Petitti, D. B. EBMのためのデータ統合型研究: メタ分析, 決断分析, 費用効果分析の理論と実際. 福井次矢, 青木則明監訳. *メディカル・サイエンス・インターナショナル*, 1999, 225p.
  - 21) Light, R. J.; Pillemer, D. B. *Summing Up: The Science of Reviewing Research*. Harvard University Press, 1984, 191p.
  - 22) Saxton, M. L. Reference service evaluation and meta-analysis: Findings and methodological issues. *Library Quarterly*. 1997, vol. 67, no. 3, p. 267-289.
  - 23) Ankem, K. Factors influencing information needs among cancer patients: A meta-analysis. *Library & Information Science Research*. 2006, vol. 28, no. 1, p. 7-23.
  - 24) Eldredge, J. D. Evidence-based librarianship: An overview. *Bulletin of the Medical Library Association*. 2000, vol. 88, no. 4, p. 289-302.
  - 25) Rosenberg, W. M.; Deeks, J.; Lusher, A.; Snowball, R.; Dooley, G.; Sackett, D. Improving searching skills and evidence retrieval. *Journal of the Royal College of Physicians of London*. 1998, vol. 32, no. 6, p. 557-563.
  - 26) Pribesh, S.; Dickinson, G. K.; Bucher, K. T. A. Comparison of online and face-to-face cohorts in a school library media specialist graduate program: A preliminary study. *Journal of Education for Library & Information Science*. 2006, vol. 47, no. 4, p. 303-323.
  - 27) Martyn, J.; Lancaster, F. W. *Investigative Methods in Library and Information Science*. Information Resources Press, 1981, 260p.
  - 28) Sandstrom, A. R.; Sandstrom, P. E. The use and misuse of anthropological methods in library and information science research. *Library Quarterly*. 1995, vol. 65, no. 2, p. 161-199.
  - 29) Hjørland, B. *Library and information science: Practice, theory, and philosophical basis*. *Information Processing & Management*. 2000, vol. 36, no. 3, p. 501-531.
  - 30) Koufogiannakis, D.; Slater, L.; Crumley, E. A. Content analysis of librarianship research. *Journal of Information Science*. 2004, vol. 30, no. 3, p. 227-239.

## 要 旨

【目的】 図書館業務における研究成果の活用と研究の実践を促進するエビデンス・ベースト・ライブラリアンシップ (EBL) の適用可能性と問題点を検討する。

【方法】 日本の雑誌論文 100 論文に対して EBL で挙げられている根拠のレベル, 課題, 主題領域を調査し集計した。

【成果】 日本の図書館情報学論文は EBL の根拠のレベルでは, 事例研究と専門家の意見が大半を占め, EBL のレベルの高いとされるサミングアップは 2 件にとどまった。また, EBL で示されている三つの課題にあてはまらず, 課題のない論文が 30% と多かった。主題領域にも偏りがみられた。しかし, EBL の枠組みを検討すると, EBL がエビデンス・ベースト・メディシン (EBM) の影響を強く受けているため, 図書館情報学文献に適用するには困難が多いことが確認された。